

『九鬼周造文庫目録』と『九鬼周造全集』の経緯

元『九鬼周造全集』編集協力 石垣哲二

1 九鬼周造文庫との出会い

私が甲南大学文学部に入学したのは、70年安保の名残で学園紛争最中と言っていい昭和46(1971)年4月である。小中高と勉強に対して非常にいい加減だったことが骨身に染みて入った大学なので、同じ失敗はするまいと、遊びはもちろんのこと、友達も要らない、学生運動も関係がない、とにかく学びに徹しようと思っていた。その点、甲南を選んで間違いはなかった。講義中に少しでも疑問があると手を挙げて質問したが、迷惑そうになさる先生は誰もおられなかったばかりでなく、「後で研究室にいらっしゃい」と温かいまなざしを向けて下さったのだ。私は遠慮せずに伺った。ある時どこかの研究室で西洋史学の衣笠茂先生とばったりと会い、「君はこんな所にも来ているのか」と笑われたことさえあった。その数ある研究室の中で最初に行ったのが哲学研究室だった。

講義中にいくら何を質問をしても、現実世界は夢や理想に満ちあふれたものではなく極めて冷厳なものだ、と学生の甘っちょろい感傷をはねつけ、「この人は「現代」の権化だ」と思わせるくらいその時代の暗部を見つめておられた佐藤明雄先生(註1)。時代や文明を深く思索し、在学中は午後5時に研究室が閉まると「甲南そば」で「そば定食」をごちそうして下さりながら何時間でも我々に語りかけて下さり、定年後も度々自宅におじゃまし、91才で亡くなるまでご指導下さった相原信作先生(註2)。常に一本一本ケース入りの葉巻を薫らせ丸善のマナスルシューズを履き「勉強が面白いと言っているうちはまだ勉強のことがわかっていないんだよ」と勉強に焦る私に余裕で接して下さり、「相原君と僕とは生まれが1世紀違うんだよ」といった冗談をふつと漏らされたりした村田教之亮先生(註3)。今ご自分が思索研究していることを率直に話され、耳学問の重要性を教えて下さったり、「先生の目からご覧になって、今の哲学または哲学者に何が足りないと思われますか」と質問すると、「もっと歴史を学んで欲しい」とおっしゃるだけでなく、「一緒に Henri Sée の Science et philosophie de l'histoire を読もう」と言って下さった前川貞次郎先生(註4)。「東洋哲学」の講義を3年連続して聴き、「君がいるから去年のノートが使えなくて困る」とおっしゃりながらも、アビダルマ仏教を中心にいろいろと話をして下さいだけでなく、飲み連れて下さった所が祇園の串カツ「花ぎおん」で、女将は何と九鬼が晩年に生活を共にした中西キクエさんの舞子時代の同僚で、九鬼をよく知っている人だったというすごい偶然を体験させて下さった工藤成樹先生(註5)。思い出しても感謝で涙が出そうなほどの方々に研究室で出会え、師事できたことは一生の幸せである。皆一流の学者でかつ人格者でいらっしゃった。「一流」「本物」に出会えるかどうかはその人の一生を決定す

と言っても過言ではないと、教師となりやや年老いた今、しみじみと思う。私が以下に述べる九鬼のことができたエネルギーや、今こうして教師としてやっていけるエネルギーは総て甲南大学で出会った先生（「教授」ではない。私にとっては「先生」の方がずっと偉いのだ）方から戴いたものだ。

当時、研究室は本館北側の7階建ての建物の3階にあり、研究室の和洋書と京都大学人文研所長だった安部健夫氏の漢籍を中心とした文庫、そして九鬼周造文庫が静かに収納されていた。九鬼文庫が研究室に収納されるまでの経緯については佐藤先生の文(註6)に詳しいが、私が文庫に出会ったときは、分散されていたものがようやく一カ所にまとめられ眠りについていて如きであった。NDC 順に並べられ、図書カードはあったものの、ほこりが積もり、本立てがない棚では横倒しになっているものもかなりあった。

2 九鬼周造文庫目録刊行の経緯

ある日、文庫にあった『「いき」の構造』をその書名に惹かれて読み出したところ、154頁を一気に読了してしまった。苦惱・煩悶といった汚泥が静かに沈殿してどこまでも澄み切った世界、澤瀉久敬先生(註7)の言葉を借りれば「水晶の宮殿」をそこに見た。学問と美の合体！ 私の文庫を見る目が変わってしまった。Ecce homo！ 先ず佐藤先生にお願いして本立てを入手してもらい、研究室のアルバイトの方と共に本をきちんと立てていった。次に、柿本嘉三君や、中農(旧姓貝島)真紀子さん・豊田久仁子さん(註8)たちとほこりを払い、乾いた皮装丁の本のためにワセリンを塗り込んでいった。右手の人差し指と中指の指紋が2回消えた。

そうして文庫に接しているうちに「九鬼番号」の存在に気がつき、どうしてもこの順番に並べ替えてみたくなり佐藤先生にお願いしたところ、「いいだろう」と言うことになり、思い切って研究室そのものを改造することにした。研究室の見取り図を書き、研究室の和書洋書に要する書架の数、安部文庫のそれ、そして九鬼文庫のそれを数えて、それぞれの大きさの模型を先輩の高橋健さん(註9)が作ってくれ、それを按排し、「研究室の洋書の間(主に客間のように使用)」「研究室の和書の間(主に居間のように使用)」という二つの十数人が集えるスペースと、隔絶した研究机2カ所の確保と、「九鬼の洋書の列」、「九鬼の和書の列」そして「安部文庫」を効率的に並べることが多くの人の共同作業でできた。更に、後に目録の第3部に記載されるものを収納できる大きなケースも置くこともできた。「和書の間」は、階の上が講義室ということもあり、先生方学生が学部を問わず来られて、談論風発さながらサロンとはかくやと思わせる空間になった。アカデミックなことから「紅茶キノコ」を栽培するという柔軟性までを兼ね備えた場所だった。

この柔軟性については、大学が将来大学の教員等の研究職に就く人のためのものであるならば、軟弱なもの、けしからんものでしかなく、院生ならまだしも、学部学生が気軽に

入れる研究室など言語道断であろう。実際そのような批判が一部にあったと聞いていたが、佐藤先生は柳に風と受け流して下さっていたようだ。プラトンをこよなく愛する先生にとっては monologue よりも dialogue の方が大切だったからに違いない。

九鬼番号に並べ替えることにより、九鬼が文系理系を問わず極めて多方面に興味を持ち、雑誌を除いて7400冊ほどだから量的にはそれほど多くはないにしても、基本書をきちんと押さえた上で、稀覯本も含めてレベルの高い蔵書家・愛書家だったことがわかった。そこで私の思いは「蔵書も著書のようなものだ。目録を作って九鬼周造がどのような人であったか後世に残したい」になった。九鬼は「書齋漫筆」で「たとえどんな主題を選んででもそれに関する自分の体験やら判断の仕方やらがかなり濃厚に出てきてしまう」と書いているが、蔵書にもそれがよく表れている(ある非常勤講師の方が、文庫の中に『東都の名妓』(九鬼番号1142)があるのを見つけ手に取り、「ああこんなものまで残っている。格好悪いなあ」と言われた。九鬼は無縁の人である)。もう勝手に作る方向で動き出してしまった。

その作業と平行して、3回生の夏休みの昭和48(1973)年8月28日から9月3日の間に、九鬼の残した新聞の切り抜きがこのままでは散佚してしまうと気になり整理にかかった。その数は、シリーズものを1点と数えると、約330点にのぼり、一枚一枚新聞名と内容を自分のノートに記録していった。日付がはっきりしているものの中で一番古いものは、帰国した昭和4(1929)年の7月29日の大阪朝日新聞の社説「富裕階級の節約」で、一番新しいものは、亡くなった年である昭和16(1941)年の1月22日の大阪朝日新聞京都版の科学欄「貴重な蛇」である。切り抜きはその必要な部分だけの場合や印が付けてある場合は分かり易いが、ページのままでは目的がわかりにくいのも多かったが、不思議なことに新聞の方からこれだと教えられたように思う。多いのはやはり「いき」と偶然に関するものであった。中で特に印象的な切り抜きは、九鬼の父隆一の病状が悪化して亡くなるまでの記事を丹念に残していたことだ。

佐藤先生が大学当局に掛け合って下さり、補正予算での目録出版が決まって、印刷会社数社に見積もりをとったとき、大阪市福島区の日本印刷出版株式会社が「この本は非常に貴重なものだし、我が社にとっても名誉なことなので商売抜きでやらせてもらいます」とおおよそ大阪商人らしくない姿勢で「1000冊300万円」という他社の半分以下(一番高い見積もりは800万円台だったと記憶する)という破格の値段で請け負ってくれた。

原稿作成は、英文タイプライターも使い、研究室の図書カードとの照合だけでなく、最後の段階では、昭和18(1943)年に旧制甲南高等学校に運び込まれたときに作られた目録(薄い紙にタイプで1冊1行で打たれた簡単なもの。「九鬼番号」はこの時に整理のために付けられたものかも知れない。それでもNDCよりは文庫全体の持っている性格特徴をよく出していると思う)を図書館から借り受け、それとも照合しながら進めていった。その旧目録にありながら現存しないものについても、ひょっとしたら一カ所に集めるときに漏れているものもあるのではないかと、書名を手がかりに図書館本館だけでなく、他の研究室も探させていただいた。そう

いうことをしていると「これも九鬼文庫のものではないか」と見つけ出して下さったこともあり、結構多くの本が見つかった。逆に本来九鬼文庫になかったものが数冊混じっていることもわかった。残念ながら持ち出して紛失、空襲で焼失したとかのものもあったが。

いよいよ校正が始まったとき、九鬼の親友の天野貞祐先生(註10)と九鬼の愛弟子たる澤瀉先生に、佐藤先生の方から何か目録に文章を書いて下さるようにと依頼したことがきっかけになって、天野先生からは、手元に持っておられたリッケルトのブロンズ像とカントの三批判書の初版本及び九鬼の山科邸の茶室に掲げられていた「詠婦」の扁額等が、澤瀉先生からは、天野先生からの指示もあり、当時京都衣笠鏡石町のご自宅にあった柳行李一杯分の九鬼の講義ノートが、九鬼文庫に追加寄贈されることになった。更に澤瀉先生は目録のフランス書の部分の校正をやりましょと見て下さり、何度かはわざわざ文庫に足を運ばれご自身で原書を手にして確認作業までしていただいた。そのため校正も十回近くになったが日本印刷の小西三郎さんは嫌な顔一つせず「何校でも結構です」と付き合ってくれ、ようやく昭和51(1976)年2月15日、九鬼が存命ならば満88才の誕生日に完成した。日本印刷は1000冊の他に黒皮装丁を5冊と、紙型は保存できないということで真っ白で光沢のある厚手の紙に印刷した紺布装丁の複写用の1冊を無料で作ってくれた。黒皮装丁は、天野先生・澤瀉先生・佐藤先生・研究室そして私が1冊持っている。目録は通し番号を付け、国立国会図書館を始め、全国の大学図書館ならびに哲学研究室に無料で郵送し、希望者には1冊4500円で頒布し、その売上金は全額大学会計に入れた。送り先のノートがあるはずである。

目録は私の大学在学中には完成できず、「哲学倫理学研究室副手」の形で残って足かけ4年の歳月を要した。就職もせずそんなことをやっている私を家族も友人も理解できなかったようだが、「青春」が「代価を求めず他のために行動できる時期」とすれば、「かれの青春の記念碑」と佐藤先生が記して下さったのは蓋し至言である。ところが大学当局は、これも佐藤先生の提言によるものと思われるが、私の労に対し現金30万円で報いてくれた。また時の学長鈴木正治先生はポケットマネーで5万円を下さり、私はそのお金でドイツ文学者である先生に因みハンプルグ版ゲーテ全集を買わせていただき、第1巻の扉にサインを戴いた。さらに甲南学園の理事のお一人であった坂野清夫氏も非常に喜んで下さり、ゴルフのカップを溶かして作られたという「KONAN」のロゴの入ったタイピンで、シリアルナンバー249を私に、250を佐藤先生にプレゼントして下さった。佐藤先生は、ドイツ人の手になるスペイン芸術の大部の研究書「Spanien」を、衣笠先生はセイコーのひげそりを下さった。また研究室の仲間は完成記念会を催してくれた。そういう代価は予想外だったが、ありがたく受け取った。

3 九鬼周造全集刊行の経緯

私は大学に入ってから、上記の諸先生方の影響もあり、奨学金や家庭教師で得た収入のほぼ全額を本代に費やすほど本が好きになった。でその目録完成間近な時に一番欲しかったのが実は『九鬼周造全集』である。もっともっと九鬼の文章を活字で読みたかったのである。そこで、友達に車を運転してもらって、衣笠の澤瀉先生のお宅に前述の九鬼の講義ノートを受け取りに行った帰りの車中で、先生に全集を作っていただけませんかとお願ひしたところ、「君は一体僕が『現代フランス哲学講義』1冊を作るのに何年かかっていると聞いているのだ」とけんもほろろで取り付く島もない様子であった。それまで「フランス哲学とかドイツ哲学ではなくて「哲学そのもの」はあるのですか」などと質問し、初対面とは思えないようなムードでいたのが一気に険悪になってしまった。しかし、岩波書店が、恐らく天野先生から目録出版のことを知らされ同時に全集出版の要請を受けて、動き出した。その手始めに編集担当の合庭惇さんが研究室に来られ、講義ノートを点検の上、社内で検討したいので全部のコピーを2部欲しいと依頼され、私が大学のコピーセンターに運んで処理してもらい、25万円ほどの請求書と共に送ったように記憶している。コピーが「ゼロックス」と呼ばれ1枚30円の時代である。ちなみに「青焼き」は1枚10円だった。

全集刊行が正式に決まり、岩波書店からは編集部部長の竹田行之さんが著作権等の法的なことも含めた総責任者としてこられ、担当者として合庭さんと柿沼マサ子さん、編集委員として天野先生・澤瀉先生・佐藤先生が決まり、私はどういう立場で参加するのだろうかと思っていたら、「編集協力」になった。当時、自薦他薦を問わず幾人かの編集委員候補の名前が上がっていたそうだが、天野先生は例外として、編集会議に常に出られることを条件にするという方針から、3人で作業することになった。その時に、全12巻になること、その各巻の構成などが予め岩波の方で原案ができており、それを了承する形で決まった。全体で意見が分かれたのは「漢字仮名づかい」をどうするかであった。先生方は「新字新仮名づかい」を主張され、合庭さんと私の若手が「正字旧仮名づかい」を主張したのであった。理由は九鬼の生きた時代と九鬼の文章の息づかいを残したいということであり、結局その意見が認められた(蛇足ながら、新九鬼全集があり得るならば、「新字新仮名づかい」でよいように思われる。理由は、九鬼の思想がもはや歴史を超えているからである)。また私の役割は、講義ノートを活字にできるように起こすことと、「解題」の下原稿を作ること、及び校訂になった。そして、昭和55(1980)年、岩波書店恒例の元旦の新聞一面広告を見たとき、「さあ始まるぞ」という思いで身が引き締まった。しかしその約2ヶ月後、天野先生が亡くなられた。

天野先生には3回お目にかかった。最初は佐藤先生と共に完成した文庫目録を持参し報告に伺ったときだ。武蔵野市の閑静な住宅街の一角にあるお宅は敷地が100坪くらいの平屋であった。応接室に通されるまでの廊下で見たもので今でもよく記憶に残っているもの

は「野球殿堂入り」されたときの大きな楯である。先生は目録刊行を喜んで下さり、「自分が文部大臣の時に学校給食を始めたがあれはよかったと思っている。あの原点は甲南にある」「(これからの大学の理念としてどういうものを考えたらいいですかの間に對して) 哲学を学べ、歴史を学べ、古典を学べ」とか、自分が病気になったとき甲南の父兄の車それも薪の車で病院に連れてもらったとかの話をされた。昼食に出していただいた鰻重と肝吸いが美味しかったことも記憶に新しい。こうして先生は我々の労を精一杯ねぎらって下さったのだ。その後、私は2度個人的に伺った。いろいろと質問もあったが、一番のねらいは「九鬼の日記」であった。もし持っておられたら是非九鬼文庫に入れていただきたい、今それをしておかないと後世に禍根が残ると思ったからであった。しかし先生は「そんなものはない、九鬼君のプライベートと哲学は別のものだ」とやや怖い顔でおっしゃった。帰るときいつも奥様のタマさんと玄関の板敷きに正座され、私が靴を履こうとすると先生は両手で靴べらをお持ちになって65才も年下の私に差し出されたのであった。弔問に訪れたとき、お宅の玄関でその靴べらを見つけ、「これを下さい。家宝にしますから」とどれほど言いたかったことか。ご葬儀の帰り岩波書店に寄った。澤瀉先生と佐藤先生は緑川社長の車で、合庭さんと私は電車で社に行った。社長室で、先日亡くなった岩波雄二郎氏に紹介されると共に、改めて社長から全集のことをよろしくと言われた。雄二郎氏は物静かで大きい人だった。メロンと紅茶が出てきたのには驚いた。

全集第2巻『偶然性の問題』が昭和55(1980)年11月に第1回配本となることが決まった時、私はそれまで3年間勤めていた高等学校の専任講師の職を辞して、時間に余裕を持てる非常勤講師になった。全集の仕事は、澤瀉先生でさえ1冊の『現代フランス哲学講義』を作るのに4年ほどを要したのだから、片手間にできるわけがないのである。私は既に結婚をしていたが、ある意味で背水の陣を敷いて臨んだのである。見かねた澤瀉先生佐藤先生は岩波書店に交渉して下さったようで、「編集料」の名目で月10万円を受け取れるようにして下さい。もっとも税金を引かれて手取りは9万円であったが、とても助かった。

澤瀉先生の記録によると、編集会議は60回に及んだ。場所は主に研究室だったが、数回は澤瀉先生の甲子園のご自宅を使わせていただいた。ある時の午後、私が「九鬼先生のノートでは tout ですが、原書では toute となっています。どうでしょうか？」と伺ったところ、先生は時計を見て「もう起きているだろう」と言って部屋を出てどこかに電話をかけられた。フランス語でやりとりがあった後戻ってこられて、「どちらでも良いそうだ」と笑顔で答えて下さった。相手はフランスの著名な哲学者 Henri Gouhier さんだったように記憶している。

無我夢中で配本の4ヶ月前に原稿を完成させる作業を続けていくうちに、修士の4年目なので修士論文を書かなくてはならなかったが、とてもではないが手が回らない。殊に全集の目玉とも言うべき第2回配本の『文学概論』が難関であった。そこで論文に代わるも

のとしてこの仕事のことを佐藤先生が人文研究科に打診して下さったところ、いいでしょう、概要を書いて提出するよにとのことで、安心して作業に没頭し、年末に刊行済みの本を添えて、原稿起こしや解題作成のこと、校訂の具体的なことなどを書いて出したが、却下されてしまった。澤瀉先生にこのことを話すと、「どうして？ 僕は十分に修士以上の価値があると思うのだが」と首を傾げられた。もっとも「校訂」という仕事の重要性に対して余り理解がないということは、後で岩波文庫のある古典の校訂をされた方から聞かされたことではあるし、目録を作ったことも一部ではそれほど評価しない向きがあった。相原先生でさえ、先生の所に送られてきた京都大学人文研編『西田幾多郎全蔵書目録』を見て、こんなものにも文部省の助成金が出るのだなあとおっしゃり、私に下さったほどであるから。

編集の具体的なことにも触れておきたい。まず「ノート起こし」であるが、九鬼のノートはそのまま講義で読まれたと思われるくらいきちんと書かれている。村田先生が「大学の講義はそのまま本にならなくてはいけない」と言われたことがあったが、まさにその通りである。基本的に見開きの右ページを使いペン書きである。書き慣れてはいるが見間違えような字ではない。それは欧文和文両方について言える。青や赤の色のアンダーラインを使い、分かり易い。この辺りにも九鬼の頭のシャープさがよく出ている。活字に組むに当たってできるだけこの雰囲気を出したいと思ってアンダーラインの工夫をしたつもりである。「ノート起こし」の原稿は岩波がコピーを取った2部の中の1部を用いた。残りの1部も岩波から私がおもって現在は文庫に入れてある。

「解題」については、合庭さんは筑摩書房版『森有正全集』のそのようなものを希望しておられたが、一読、私には無理だと分かったので、できるだけ思い入れなどを排除して正確なデータだけを記しておこうと考えた。岩波の200字詰原稿用紙に書き、編集会議でそれをたたき台に手を加えていった。但し、6～8巻については、私は書いていない。

「校訂」についてはやはり時間が掛かった。既に活字になっているものとの校合は手沢本もあり、慎重さを失わなかったら難しい作業ではなく、手書きのものも字は慣れれば読みやすく、九鬼が引用している本はほとんどが文庫にあるはずなので、もっとスムーズに事が運ぶものと思っていたら、そうはうまくはいかない。ページ数しか書かれていなかったり、引用書が見つからなかったり、あっても前記の tout のようなことがあったり、欄外の記述が本文の何に関係するのか分からなかったり、という細かいことから、以前のノートを再利用している場合に、何のノートのどこから持ってきたものか、復元するのが難しい。特に第9巻『講義現代哲学』『講演現代哲学の動向』は入り乱れている上に、加えたり省略したりしているようなので難しかった。一番の難関は「いきの本質」（「いき」の構造準備稿と呼んでいたもの）である。あれについてはもう一度じっくり時間をかけて見直してみたいという気持ちがある。その結果、今の形で良かったのだと得心がいけばそれで良い。

紆余曲折を経ながらも出版できたのは、岩波書店の校正の人たちの熱意と厳しさがあつたからである。とにかく妥協を知らない人たちであつた。書店の方針で「原」とか「ママ」は付けないように可能な限り調べて欲しいということだつた。校訂の趣旨が「テキストとして信頼に堪えるものを作る」なのだから当然のことだが。聞けば、本来そういうことはあつてはならないそうだが、九鬼に情熱を傾けて仕事をしておられたようだ。私淑という言葉さえ聞いたような気がする。一度ノート現物を持って社まで来てくれと言うことで行つたことがある。すると貯まっていた疑問を矢継ぎ早にされて、それに対応するのが大変だつた。仕事を終えて、宿舎に当てられていた「山の上ホテル」のバーで遅くまで九鬼について熱く語り合ったのを思い出す。次の日も熱く仕事をして、帰りに乗った日本航空機が管制ミスにより伊勢湾上空で全日空機とニアミスをしてあわやになっていたことを翌日の新聞で知ったとき、もう少しで貴重な九鬼ノートを永遠に失うところだつたと肝を冷やしたのも遠い日の思い出である。

4 九鬼周造全集完成その後

こうして、総ページ数で言うるとほぼ半分が未発表のものからなる『九鬼周造全集』が、予定の昭和56(1981)年10月から5ヶ月遅れの翌年3月にずれ込んでようやく完成した。最後の第9巻・第10巻・別巻の3巻は大変難しく、しかも編集者の方も出版社の方も妥協しない人ばかりなのだから仕方がない。特に基礎となる原稿起こしで手間取つたのだから私の責任は大きかつた。それでも、岩波書店は、京都の祇園の「五十嵐」というところだつたと記憶するが、打ち上げをしてくれた。岩波からは竹田さん、合庭さん、柿沼さん、こちらは編集者3人である。九鬼ゆかりの「一力茶屋」でとわれわれ編集組は半分冗談半分本気で言っていたのだが冗談の方に決した。極めて和気藹々とした中で食事を終え、「また九鬼の同窓会をしましょう」と言って別れた。全集初版の出版部数は4500部ほど、また、著作権は中西家にあるが、編集権は編集者にあると聞いている。

また別に、澤瀉先生ご夫妻が、3月30日だつたと思うが、佐藤先生ご夫妻と私どもの夫婦を大阪ホテルプラザのフランス料理に招待して下さい。なぜ夫婦かというと、全集完結の陰には家庭の協力があつたに違いないという奥様の心配りがあつたからである。また、澤瀉先生にとっては、ご自分の生涯の業績の中でも「医学概論」と比肩する重要なものが完成した安堵感とでも言うべきものがおありになつたからだと推測する。とても楽しく食事をいただいて帰るとき、澤瀉先生ご夫妻は阪神電車なので「じゃあ」と地下の方に降りて行かれるのをちらっと見ると手をつないでおられた。何とも微笑ましいシーンであつたが、それがお元気な奥様を拝見した最後になつてしまったのはとても残念だつた。先生の『わが師わが友』(経済往来社 この本の 1 恩師 4 九鬼周造先生 に先生の九鬼に関して書かれたすべての文章がまとめられている)の序に「私に八十才の齢を得させてくれた亡き妻」と

あるが私はその一コマを見たことがある。佐藤先生が中国に行かれていて、私だけが先生のお宅で編集作業をするために伺ったとき、普段忙しい奥様がたまたまご在宅で、私にお茶と和菓子を出して下さった。そうしたらそれを見て先生が奥様に「ねえ喜代子、僕もいいだろう？」と嘆願されたら、奥様はにべもなく「いいえ、あなたは駄目です」。私は間の悪いことになって、そのお菓子を食べたかどうかはつきりとは覚えていないが、先生と私の仲なのできつと何か言いながら美味しそうに食べたに違いない。こんな言い方は不謹慎なのだろうが、澤瀉先生には仲良くさせていただいた。これも九鬼のおかげである。

完結後、私は元の高校に「教諭」として迎えられるに至っている。年齢も九鬼が没した年を超え、感慨一人である。この度この拙文を書くにあたり、佐藤先生や澤瀉先生の関連のご文章を再読したが、細かいところで齟齬があり気になるが、どれが真実なのか芥川の「藪の中」ようになって申し訳がないと思う。また、出来事の前関係・時間関係が、例えば研究室の改造がいつであったかなど、判明でないことがある。「目録」や「全集」の刊行の経緯を忘れないうちに「覚え書き」しておこうと考えたのだが、これでは「うる覚え書き」である。

(平成19(2007)年3月6日天野先生のご命日に)

- 註1 昭和4(1929)年生まれ。旧制甲南中学高等学校・京都大学文学部哲学科卒。現在は甲南大学名誉教授。ハイデルベルクで Karl Lowith に師事後、甲南に着任。大学各所に分散されていた「九鬼文庫」を哲学研究室に集める。(『目録』や『全集』が刊行された第1原因は文庫そのものが甲南に来たことであるが、第2原因は「文庫」として一つにまとまっていることだと考えるなら、この「集める」ということの意味は大きい。) 主要論文は「「自由」の変貌と現代社会」「人間の「神化」と悪の所在」(共に甲南大学文学会論叢34・38号)などがあるが、「行動する哲学者」として、70年代半ば以降の中国とりわけ福建省の経済的發展に大きく寄与したり、ペーパークラフトによる戦時沈没船の復元で乗組員の遺族の悲しみを癒しNHKや新聞で何度も大きく取り上げられたりした。また「身体」についての独自の考察から、現在は「共時性」を中心にした宇宙論を展開中。
- 2 明治37(1904)年生まれ。平成8(1996)年歿。旧制第三高等学校・京都帝国大学文学部哲学科卒。大阪大学名誉教授。昭和44(1969)年甲南大学特選教授。西田幾多郎晩年の弟子でいわゆる「京都学派」の一人。語学の天才(私を知っている限りで、英独仏希羅西伊中朝露梵及びエスペラント。「私は翻訳をほとんど読んだことがない」と言われたことがある)。翻訳に岩波文庫の Leopold von Ranke 『世界史概観』(共訳)『強国論』『政治問答』、現在は講談社学術文庫に入っている Meister Eckhart 『神の慰めの書』などがある。論文としては、阪大時代にも「現代倫理学の問題」や「マルクス主義の一考察」「現実の問題と学問の問題」など優れたものがあるが、90才に

なってようやく出版された論文集『核時代の哲学と科学』（行路社）所収の11編の中10編が昭和46（1971）年以降のものであることを考えると、哲学者としての真価は甲南大学に來られてから発揮されたと思う。先生に九鬼周造のことを覚えておられますかと尋ねたら、「自分にとって先生というと西田先生と田辺先生しか眼中になかったから全く覚えていない」というお返事だった。

- 3 明治33（1900）年生まれ。平成10（1998）年歿。東京帝国大学西洋史学科卒。大阪大学名誉教授。岩波文庫の『古代への情熱—シュリーマン自伝』の翻訳で有名だが、エーゲ海文明・ギリシャ美術（特に壺）の第一人者。著書『エーゲ文明の研究』『ギリシャ美術』他多数。
- 4 明治44（1911）年生まれ。平成16（2004）年歿。旧制第三高等学校・京都帝国大学文学部史学科卒。京都大学名誉教授。京大人文研の共同研究で『ルソー研究』に参加。著書『フランス革命史研究』創文社、『絶対王政の時代』講談社など、訳書に岩波文庫 Jean-Jacques Rousseau『学問芸術論』『社会契約論』（共訳）など多数。（ある時先生に「賀茂川の床」ってどんな所ですかと言うと、「連れて行ってあげよか」とおっしゃり研究室のアルバイトの人と一緒に連れていただいた。祇園先斗町の一見さんお断りの店に入り、あいにくの雨だったので、十二畳ぐらいの部屋で食事をいただいた。その時「君はフランス革命についてどう思うか」と聞かれた。聞けば翌日東京で東大総長だった林健太郎さんたちとフランス革命についての座談会があり、歴史プロパーではない一般の人はどう考えているのか知りたかったとのことだった。帰りに先生がよく行ったという「フランソワ」に入って三高ではバレー部の選手だったとかのお話を伺った。ちなみに座談会は『革命の研究』高木書房になった。）
- 5 昭和4（1929）年生まれ。京都大学文学部卒。現在は四天王寺国際仏教大学名誉教授。榊亮三郎のサンスクリット語文法の名著『梵語学』の新修者。インド人と言っても通用する風貌で、実際インドを旅行すると同行の京大の学生たちは「おまえは日本人か」と聞かれるのに自分は聞かれないと言っておられた。講義では日本の「仏教」という言葉が有する宗派的なものがなく、仏教本来の姿をできるだけ客観的に示しておられた。だから安心して3年間も講義を受けられたのだと思う。（お酒が好きで、ある年お年始に山科のお宅に昼頃伺ったら、国鉄（JR）の時刻表を見て、「10時37分だな。それまで飲める」とおっしゃった。何のことかと思ったら私の家がある須磨までの終電車を見ておられたのだ。）
- 6 『目録』後記
- 7 明治37（1904）年生まれ。平成7（1995）年歿。旧制第三高等学校・京都帝国大学文学部哲学科卒。大阪大学名誉教授。日仏哲学会名誉会長。西田幾多郎の晩年の弟子で「京都学派」の一人。著書は『フランス哲学研究』『医学概論』『医学の哲学』や以前高校の教科書によく掲載された『「自分で考える」ということ』など多数あるが、訳書は九鬼の『偶然性の問題』をフランス語に訳したものを以外には寡聞にして

知らない。(初めて甲子園のお宅を訪れた時、応接間に通され、「ちょっと待っていて欲しい。これでも読んでいたらいい」と渡されたのが「教授会記録」とか題されたものだった。「こんなものを読んでも良いのですか」と聞くと笑っておられた。席を外されたので恐る恐るあけると、なにやら紙と鉛筆で描かれた線画であった。にこやかに戻ってこられた先生に聞くと、教授会で配られた紙の裏に描かれたものらしい。それが後に『形』という表題で自費出版されたご本の原本だったのである。先生にはそういういたずらっぽいところがあった。)

- 8 3人は大学同期の人たち。柿本君は現在奈良で小学校の先生をしており、中農さんは2児の母。豊田さんは阪神大震災で歿。
- 9 現在姫路獨協大学教授(倫理学)
- 10 明治17(1884)年生まれ。昭和55(1980)年歿。旧制第一高等学校・京都帝国大学卒。京都帝国大学名誉教授。旧制甲南高等学校校長、一高校長を歴任。日本学生野球協会会長・日本育英会会長を経て、吉田茂総理大臣に文字通り三顧の礼を以て第72代文部大臣として迎えられた。その甲南に赴任するに当たって、九鬼周造旧蔵書を甲南にもたらされたのである。

